国　語

（分析は本誌掲載問題のみです）

出題傾向

日程	問題	出題分野・テーマ	難易度
総合型選抜入試 9月20日	基礎Ⅰ型	（評論）河合隼雄『物語とふしぎ』	標準
一般公募制推薦入試 11月22日	適性検査	（評論）寺田寅彦「科学者と芸術家」	標準
一般入試 1月31日	第1問	（評論）大島智夫「島松の別離―Boys be ambitious! を誰が聞き、どのように広まったか」	やや易
	第2問甲	（評論）野矢茂樹「言語哲学がはじまる」	標準
	第2問乙	（古文）『源氏物語』蓬生巻	標準

解答方式は、漢字の問題も含め、いずれの日程においても全問マークシート方式である。総合型選抜入試と一般公募制推薦入試は大問1題、一般入試は大問2題（第2問は甲・乙いずれかを選択）となっている。

●総合型選抜入試

2026年度は、現代文1題のみであった。小問数は15問、枝問を含めると解答数は17となっている。

設問構成は、漢字・空欄補充・内容説明・理由説明・表現換言・脱落文補充・具体例提示・内容合致などである。

本文は、心理学者である河合隼雄氏が「物語」における「ふしぎ（不思議）」の意味を考察しながら、『ふしぎの国のアリス』を例に「ふしぎ」について述べている文章である。著者によると、「ふしぎ」は人間の心の深層と結びついたものだということである。物語の中の超自然的出来事は、人間の無意識や心理的現実を象徴的に表現したものであり、人間が心の豊かさや創造性を保つためには、この「ふしぎ」に入り込んでいく態度が重要であると主張している。著者が「ふしぎ」をどう捉えようとしているかを読み取ることが読解の要となる。趣旨が理解できれば、平易で読みやすい文章と言えよう。

小問については、特異なものはなく、基本的な文章読解力や、言語の運用・表現力や、考察力などが問われている。つまり、国語力を総合的に問うものとなっている。解答数が多いわけではないので、試験時間内でじっくりと考えることができ、十分に得点できる問題である。

●一般公募制推薦入試

2026年度も2025年度同様、現代文1題のみであった。小問数は16問、枝問を含めると解答数は20となっている。

設問構成は、漢字・空欄補充・慣用句・内容説明・理由説明・具体例提示・内容合致・文学史などである。

本文の著者寺田寅彦氏は、物理学者であり、かつ夏目漱石に師事した随筆家、俳人でもあった。その著者が持つ芸術感覚と科学精神との結びつきを述べたものが今回出題された「科学者と芸術家」である。やや古い文体であるため、読みにくさを感じるかもしれないが、内容は「科学者と芸術家」が近しいものであることを繰り返し述べたものであり、必ずしも難解な文章ではなく、基本的な読解力があれば十分に理解できるはずだ。

小問についても、特に難度の高いものはないが、選択肢の細かな差異を読み取る必要があるものがいくつかあり、そこで得点差が生じるだろう。試験時間内に、本文はもちろん、設問の選択肢の内容まで丁寧に読み取ることが求められている。

●一般入試

2026年度も2025年度同様、受験生が解答するのは大問2題で、第1問は各学部・学科共通の現代文、第2問は文学部日本語日本文化学科志望者以外が選択する「甲」の現代文と、文学部日本語日本文化学科志望者のみが選択する「乙」の古文という構成である。

第1問（共通問題）は、小問数が8問、枝問を含めた解答数は12である。第2問（選択問題）甲は、小問数が12問、枝問を含めた解答数は14である。第2問（選択問題）乙は、小問数が9問、枝問を含めた解答数は12であった。

第1問（共通問題）の設問構成は、漢字・空欄補充・語句の意味・脱落文補充・内容説明・内容合致などとなっている。

本文は、北海道大学の前身である札幌農学校の初代教頭であったクラーク博士とその門下生であった大島正健について述べたものである。第1期生であった大島正健はクラーク博士の精神に強い影響を受け、その後、彼の教育理念を広めていった。本文は、大島正健の孫にあたる著者の智夫が、クラーク博士の有名な「Boys be ambitious」という言葉に関する記録を検証し、その信憑性を明らかにしたものである。

本文の内容や設問の難易度は、標準的、またはやや易しいもので、基本的な文章読解力や表現力が求められるものとなっている。

国　語

（分析は本誌掲載問題のみです）

第2問（選択問題）甲の設問構成は、漢字・空欄補充・指示内容・語句の意味・関連語・理由説明・内容説明・内容合致などとなっている。

本文は、言語哲学の入門書と位置づけられる書の一部で、著者は哲学者の野矢茂樹氏である。専門的な用語をできるだけ用いず、言葉と意味の関係について説明する内容となっている。文体は比較的平易で読み取りやすいが、哲学的思考について述べたものであるため、哲学的文章に対する理解力が必要とされる。

設問の難易度は高くないが、多様な設問があり、深い読解力や考察力が求められていると言えるだろう。

第2問（選択問題）乙の設問構成は、語句の意味・現代語訳・指示内容・文法・主語の把握・内容説明・内容合致などとなっている。

本文は『源氏物語』の蓬生巻の一場面であり、『源氏物語』の中でも比較的読み取りやすい箇所が出題されている。過去の年度には、歌物語、日記文、説話集といったものも出題されているが、2026年度の物語を含め、特殊な出題はなく、ごく一般的な古文の問題が出題されていると言えるだろう。

学習対策

○現代文

現代文の問題では、様々な分野の評論文が出題されている。そのため、日頃から幅広い内容の文章に慣れ親しんでおくことが必要だろう。特に、哲学的な内容に関する文章は意識的に触れる機会を持つようにしたい。最近の哲学関連書籍は、初心者向けのものも多く、本の装丁も目を惹くものがあり、手に取りやすい。また、デジタルコンテンツにも哲学的内容を扱ったものは多くあるので、取り組みやすいものから読み始めて、難解な用語や理論についても、解説動画などを活用して、哲学的文章への抵抗感をなくしておくとよいだろう。

設問については、いずれの日程においても空欄補充や傍線部の理由・内容説明といった一般的なものが中心であるため、まずは基本的な読解力をしっかりと身につけておきたい。漢字についても、特段難解なものはなく、標準的なものが出題されているので、入試対策用の標準的な問題集1冊で構わないので、繰り返し取り組んで身につけておこう。

問題集や過去問などに取り組む際は、出題者の意図がどういうものであるかを意識しながら解答していくことが大切だ。出題者は正解を導くための手がかりを必ず用意している。例えば空欄補充などは、前後の文脈から想定できる語句や、別の箇所で類義語に言い換えられている語句が入る可能性が高い。そうした手がかりを意識しながら解答していくことで、高得点を得ることができるようになるだろう。

ただし、国語は他教科に比べて得点向上に時間がかかる場合が多いので、なるべく早い時期から対策にとりかかることを勧めたい。自分の現時点での力を超える難しい問題に焦って取り組んでも、読解力の向上には結びつきにくい。まずは半分以上正解できる程度の問題集を活用して、部分解釈や要旨把握、空欄補充など、様々な形式の問題に慣れておくことが重要である。さらに、余裕があれば、選択式のみならず記述式問題集にも取り組んでほしい。記述式では選択肢として与えられたものから答えを選ぶのではなく、自ら本文の内容を抽出する訓練ができる。記述式の問題で一定の正答率が得られれば、選択式問題の正答率向上にもつながるはずだ。様々なコンテンツを活用して、自分に合った学習方法を見つけていってほしい。

○古文

古文対策で重要なのは、まず基本的な古文単語の習得である。言語である以上、基本的語彙がなければ内容を理解することはできないので、基本的な単語帳に掲載されている重要語は確実に身につけておきたい。使用する単語帳を1冊選び、何度も繰り返し取り組んでほしい。

次に、文法だが、標準的な文法書には、読解に必要な文法事項が体系的にまとめられているため、問題を解いていく過程で適宜参照するとよい。出題された事項にはマークをつけ、繰り返し出題されるものを優先的に習得していくとよい。また、古文は動作の主体を把握することが内容理解において非常に重要であり、そのためにも敬語の用法は必ず確認しておきたい。

文学史については、出題数は多くはないものの、出題されないわけではない。ジャンル分けや、成立時期などを、国語便覧の図表などで確認し、視覚的に全体像を捉えておくとよいだろう。

また、古文で苦労しやすいのは、複数の登場人物の間で視点が移り変わりながら話が展開する文章において、主語が省略されている場合の読解である。ストーリー性のある文章では、主語が誰であるかや、登場人物の心情およびその理由などが問われることが多いため、主語の変化を追いながら、心情を表す語やその原因となった事実・出来事に注意して読む必要がある。有名な作品については、あらかじめ現代語訳されたものなどで全体の内容を把握しておくことも有効な対策となる。

現代文、古文のいずれにしても、標準的な問題を確実に解けるようになれば、難易度の高い応用問題にも十分対応できるはずだ。基礎力は非常に重要であり、時間をかけて地道に問題を解いていくという姿勢を怠らないことが、最終的に高度な読解力を身につけることにつながる。得点が伸びずもどかしく感じるときほど、基礎的な問題に取り組んでほしい。また、入試の直前期には、処理速度を上げていくために、制限時間内に解く練習も行うとよい。このように丁寧に学習に向き合っていく姿勢が、最終的には確かな力となり、合格につながることはもちろん、将来の自分にとっても有益なものとなるはずである。

英　語

（分析は本誌掲載問題のみです）

出題傾向

日程	問題	出題分野・テーマ	難易度
総合型選抜入試 9月20日	第1問	総合的な長文読解問題 「非言語的コミュニケーション（ボディ・ランゲージ）」	やや易～ 標準
	第2問	空所補充形式の長文読解問題 「女性消防士シーネ・フリーマンとロサンゼルス女性消防士養成学校」	やや易～ 標準
	第3問	空所補充形式の文法・語法問題	やや易
	第4問	空所補充形式の会話文問題	やや易～ 標準
一般公募制推薦入試 11月22日	第1問	総合的な長文読解問題 「熊：そのイメージの変遷と生態、人間との関係」	標準
	第2問	空所補充形式の長文読解問題 「タムルアン洞窟の遭難事故」	標準
	第3問	空所補充形式の文法・語法問題	標準
	第4問	空所補充形式の会話文問題	やや易
一般入試 2月2日	第1問	総合的な長文読解問題 「人間と猫の関係」	標準
	第2問	空所補充形式の長文読解問題 「サステナブル・ファッションを推進する日本のアパレル産業」	標準
	第3問	空所補充形式の文法・語法問題	標準
	第4問	空所補充形式の会話文問題	標準

金城学院大学の英語の問題は上記の通り、総合型選抜入試・一般公募制推薦入試・一般入試ともに4つの大問から構成されている。問題全体の小問総数は、総合型選抜入試と一般公募制推薦入試がいずれも26問、一般入試では36問である。解答は全て4つの選択肢から最適なものを1つ選ぶマークシート方式となっている。出題形式・解答方式に関しては、2025年度と違いはない。

第1問は長文総合問題であり、上記の全日程で2ページ（500語）程度の英文が問題文として与えられているが、問題文の難易度については、若干の違いが見られる。小問数は、総合型選抜入試と一般公募制推薦入試では7問、一般入試では12問となっている。いずれの日程も、文章中の語句や文の意味を問うものが中心であるが、段落内容との一致を問う問題が総合型選抜入試では1問、一般公募制推薦入試と一般入試では2問という違いが見られる。さらに文章全体の主旨を問う問題が一般入試でのみ出題されている。

第2問は長文空所補充問題で、1ページ（300語）程度の英文の空所に適切な語や句を選択して当てはめ、英文を完成させる形式である。本問でも問題文の難易度について、若干の相違がある。小問数は総合型選抜入試と一般公募制推薦入試で7問、一般入試では6問となっている。

第1問と第2問の長文問題で課される英文の難易度は、おおむね標準的であるが、総合型選抜入試ではやや易しめの文章が出題されている。各小問での選択肢の絞り込みに関しては、選択に迷う設問も一部にはあるが、文章全体の趣旨・展開をつかむことができれば、それほど苦労はしないはずだ。したがって、どの入試日程でも、本文の内容を正確に理解し、その趣旨を把握できるかがカギとなると言えるだろう。

第3問は文法・語法問題で、空所に適切な語や句を選び、英文を完成させる形式となっている。日本語訳は与えられていない。小問数は、総合型選抜入試と一般公募制推薦入試で8問、一般入試では11問である。問題レベルは標準的であり、大学入試レベルを超えるような難度の高い語句・イディオムの出題は見られない。ただし全日程を通じて様々な文法分野から偏りなく出題されているので、満遍なく対策をしておく必要があるだろう。

第4問では会話文問題が出題されている。空所に入る適切な1文を選択して、様々な状況での2人の人物の会話を完成させる形式である。ほとんどが友人や家族の会話という設定であり、話者のそれぞれの発言は短い。会話文特有の口語的表現はあまり登場せず、語彙の点でもそれほど難しくはないので、会話が行われている状況と話者の考えを理解することが、正解に至るカギとなるだろう。小問数は、総合型選抜入試と一般公募制推薦入試が4問、一般入試が7問である。各問の会話文の量は2回程度のやりとりで、どの日程でも大きな違いはない。

英　語

（分析は本誌掲載問題のみです）

学習対策

語彙　語彙の知識は、読解の基礎として必須であると言えるだろう。金城学院大学の読解問題では、難度が高めの語彙には多くの場合注が付けられているので、まず必要となるのは基本的な語彙をしっかり習得することである。多くの受験生が単語・熟語集を利用しているだろうが、利用する際にはただ単語・熟語を目で見るだけでなく、手を使って書く、音声付き教材を用いて耳で聴く、声に出して読む、など様々なチャンネルを通じて、自分に合った学習法を見つけるとよい。

ただ、すでに単語集による学習を始めているが、「単語集で覚えているはずの単語なのに文章の中での意味がわからない」という経験をしている人も多いのではないだろうか。語彙の学習とは、「ある英単語について単語集の最初に書いてある日本語訳を暗記し、その英単語に出会うたびにその日本語訳を当てはめる」ことではない。単語は文の中でこそ意味を成すものなので、その文中での使われ方、つまり語法をも同時に理解する必要がある。語法は、普段から「この文の中でのこの言葉の意味は何か」と考えながら、英文解釈の訓練を重ねる過程で少しずつ学んでいくことになるだろう。この過程で、単語集による学習と並行して、自分が読んだ文章の中での語の意味・用法についてもチェックして覚えていくとよい。

また、単語・熟語集を利用する際には、「語」だけを暗記するのではなく、例文を一緒に覚えることによって、「文」の中での使われ方までまとめて学んでいくのが有効である。いずれにしても、語彙の習得については長期的な計画を立て、根気よく丁寧に向き合うことが必要になるだろう。

文法・語法　金城学院大学の入試では、例年第3問で文法・語法の問題が出題されている。〈出題傾向〉でも述べたように、難易度としては標準レベルであるが、様々な文法分野から偏りなく出題されているので、信頼のおける標準レベルの文法・語法問題集の全体に一通り目を通しておく必要がある。ただし一度通読するだけでは習得は困難なので、何度も繰り返し練習することに時間を確保しておきたい。この過程で、自分にとって苦手な文法分野があると認識した場合は、それが弱点とならないように、特にその分野には時間をかけて取り組んでもらいたい。辞書や参考書も活用して、疑問点があればその都度調べることを習慣としたいところだ。

正確な文法知識は、いわゆる文法問題を解くために必要であるだけではない。文法とは簡単に言うと文の中での語の並べ方のルールなので、英文読解の前提としても文法の知識が不可欠である。言い換えれば、文法学習は英文読解の準備ともなる。問題集を用いる文法演習によって基礎的な問題を苦労せずに解くことができるようになったら、読解練習も並行して行い、読解での疑問点を文法に立ち戻って反復するように学習すれば、相乗効果が期待できるだろう。

長文読解　上に述べたことから明らかなように、英文読解には、「語彙」と「文法・語法」の総合的な知識・能力が必要となる。金城学院大学の入試では読解の比率が高いので、受験対策としては、まず単語・熟語集による学習で語彙の基礎を身につけ、問題集・参考書による学習で文法の基礎を身につけた上で、英文読解の学習を中心に置くことが求められる。

長文読解の対策については、2つのレベルに分けて進めていくとよいだろう。第一は個々の「文（sentence）」の読解である。この段階での目標は、英語の構文の規則に従って個々の文を正確に読み進めることだ。まず短い文を題材とすることから始めて、英文の骨組みを作る「S＋V」を把握することを目指そう。この時点では品詞の区別や文型の理解などが重要になるだろう。単純な短い文が理解できるようになったら、例えば述語動詞との区別がまぎらわしい準動詞（不定詞・動名詞・分詞）、文を拡大する要素である接続詞・関係詞など、文の構造全体に関わる事柄の学習に重点を置くとよいだろう。多くの場合、準動詞は句を、接続詞・関係詞は節を作るので、これらが理解できると、長い文であっても意味のまとまりごとに区切って理解することができ、1文全体の意味を把握することが容易になる。いわゆる「返り読み」をしないで、英文を前から後ろへ英語の語順通りに理解することができるようになれば、この段階の目標は達成されたと言えるだろう。

第二のレベルは、複数の文からなる「文章」を理解することである。読解練習に取り組んでいても、個々の「文」の把握はある程度できるようになったものの、「文章」全体になるとよく理解できない、という人もいるのではないだろうか。長文読解のためには文章構成の仕方（対照「Aは……、それに対してBは……」や一般論を述べた後の具体的例示「例えば……」など）についても慣れておく必要があり、これをヒントにして解答を導くことができる問題も多く出題される。必要に応じて読解用の問題集等を活用し対策しておくとよいだろう。

英文読解の練習にはある程度時間が必要であり、読解に慣れていない段階で長文に取り組むと、途中で気持ちがくじけてしまうこともあるかもしれない。そのような場合は焦らず、例えば段落ごとに立ち止まってその段落で筆者が伝えたいことをよく考えながら、根気よく取り組んでほしい。

会話文　金城学院大学の会話文問題は、語彙や分量の点では比較的取り組みやすいと言える。その意味で、英文読解が苦手な受験生は会話文問題を英文読解練習の入口とすることもできるだろう。

一般に会話文問題では、選択肢の英文で語法・文法が問われるようなことはなく、あくまで話者たちの間での話題の展開の理解を問うものがほとんどである。したがって、〈出題傾向〉で述べたように、会話が行われる状況、会話の主題、話者の意見に注意することが重要になる。

会話文対策としては、リスニング教材（英検準2級～2級程度）を用いることも一つの方法である。教材を耳で聴き、スクリプトを確認し、発音することで様々な状況での会話文に慣れることができ、同時に会話の流れに対する意識も高まることが期待できる。また、いわゆる口語的表現への対策としてもリスニング教材を用いることは有効であろう。

日本史

（分析は本誌掲載問題のみです）

出題傾向

日程	問題	出題分野・テーマ	難易度
一般入試 2月2日	第1問	弥生時代・古墳時代 A：弥生時代の社会 B：ヤマト政権の政治制度と勢力伸張	標準
	第2問	平安時代と室町時代の文化 A：国風文化 B：室町文化	標準
	第3問	大正・昭和期の社会と対外関係 A：明治初期の諸政策 B：1870年代の日清・日朝関係 C：立憲体制の確立	標準

例年同様、大問3題によって構成されているが、その中でも、近代は毎年必ず出題されている。したがって、全時代が出題範囲であるとはいえ、古代・中世・近世のいずれかが出題されない場合がある。2026年度の一般入試2月2日の日程では、近世からの出題は見られなかった。

出題分野・時代については、2026年度の上掲日程の内容だけを見ると、経済史からの出題が少なく、原始・古代の問題がかなりの割合を占めているという印象を受けるかもしれない。しかし、過去の複数年度の問題をふまえると、全時代・全分野から満遍なく出題される傾向にあることがわかる。実際に、教科書の最終ページに記載されている情報の一部が出題されていたこともあるため、教科書の全範囲、最後のページまでが出題対象だと考えておくべきである。したがって、特定の時代や分野に限定せず、教科書の全範囲を満遍なく学習しておく必要がある。

2026年度の問題は大問3題・解答数（マーク数）40という構成で、解答方式は全問マークシート方式である。各大問の構成として、従来、①1つのリード文のみで構成されるパターン、②A・Bの2つのリード文で構成されるパターン、③A・B・Cの3つのリード文で構成されるパターン、④A・B・C・Dの4つのリード文で構成されるパターンが見られたが、2026年度の上掲日程においては、②・③のパターンで構成されていた。

設問のタイプは、語句選択問題と正誤判定問題に大別される。語句選択問題（2つ以上の用語の組み合わせを選択する設問を含む）と正誤判定問題のみで構成されるというシンプルな構成が一般的で、語句選択問題や2語以上の組み合わせの設問では、5つの選択肢から正答を選択する形式が定着している。ただし、かつては、2つの語句と説明の組み合わせ問題といった、やや複雑な形式の設問も見られた。正誤判定問題は4択が中心であるが、7つの選択肢の中から2つの正解を問う問題も見られる。一部ではあるが、史料問題や、グラフや図版などの視覚素材を使用した問題、時代整序問題なども出題されており、上掲の日程には、『後漢書』東夷伝や民撰議院設立の建白書を引用した問題が含まれていた。

問題量については、正誤判定問題の比率が高いとはいえ、試験時間（60分）内で十分に解答できる分量である。また、難易度については、基礎～標準レベルの問題が多くを占めているが、正誤判定問題を中心に細かい知識を問う問題も一部見られるので、注意が必要である。

日本史

（分析は本誌掲載問題のみです）

学習対策

金城学院大学の日本史の問題は、基礎～標準レベルのものが中心なので、何よりも教科書に軸足を置いた学習を進めることが大切である。もちろん、用語をただ暗記するだけでは、正誤判定問題が多くを占める入試問題には対応できない。合格点を得るためには、教科書に記述されている内容をきちんと理解しておく必要がある。教科書の本文を精読することで、歴史の大筋や史実の因果関係をしっかりと理解することを心がけよう。また、教科書の本文の記述で、太字で表記されているような用語や人名については、確実に覚えるようにしてもらいたい。さらに、掲載されている史料やグラフ、図なども含めて全て確認するようにしよう。2026年度の上掲日程でも、教科書に掲載されている史料を用いた問題が出題されている。複数の年度・日程の問題に取り組むとわかるように、教科書に掲載されている史料は、一通り確認しておくことが大切である。

繰り返しになるが、学習に際して、ただ暗記するだけでは合格はおぼつかない。大事なのは自分の頭で「考える」ことである。出題されるテーマの中でも、とりわけ政治史は歴史学習の基本となるものなので、特に注意して学習しなければならないが、その際、為政者と事件・政策などを結びつけながら歴史の大筋をとらえ、それらの因果関係がどのようになっているかなどを考えながら学習を進めていくことを心がけよう。その上で、社会経済史や外交史にも取り組む必要があるが、そこではテーマ史的な視点が重要である。つまり、一つのテーマに対して、比較する対象を定めながら学習していくということだ。教科書を読み進める際にも、いま学習している事項が他の時代の関連事項とどのように関わっているのかを考えながら読んでいくとよいだろう。文化史については、教科書や用語集を利用して重要事項を整理したり、暗記しやすいようにカードなどにまとめたりするとよいだろう。

また、覚えた知識をしっかり定着させることも大切である。一問一答的な問題集もある程度は効果的であるが、機械的な繰り返しの作業だけでは、知識は断片的になりがちである。そうならないためには、歴史事項に関してタテとヨコの意識をもち、覚えた事柄をアウトプットしながらノートやカードにまとめるといった作業を行うとよい。例えば、ある時代の政治体制を学習しているのであれば、①同時期の外交・文化など他の分野との比較、②他の時代の政治体制との比較を行い、それらを自分でノートやカードなどにまとめたりするといった作業を行うことである。そうすることで一つひとつの知識についての理解もより深まり、学習効果も高まるだろう。

金城学院大学の日本史でかなりの比重を占める正誤判定問題は、高得点を得るためのカギを握っていると言える。ここでもやはり教科書の基本事項と史実の流れ（歴史事象の生起順や、その原因と結果）をまず正確に把握することが大切である。また、知識が十分であっても正答となる選択肢を選べないという受験生は、演習不足のため、解答を絞り込むためのプロセスが自分の中で確立できていないのかもしれない。問題を解く際は、選択肢文を短時間で的確に読み取ることを意識してほしい。文の正誤を判断する際には、どのような設問条件か（どの時期や時代が問われているのか、どのような事象に関連する事柄が問われているのか、正文選択なのか誤文選択なのか、など）を把握した上で、選択肢文の論理性や一つひとつの歴史用語の正誤、設定された時代と文の内容が合致しているか、などといったことを判断する必要がある。そうした判断力を身につけるためにも、金城学院大学の過去問を使った演習を積み重ねていこう。そして間違えた箇所やよくわからなかった点については、もう一度教科書に戻って確認することが大切である。

以上のような学習を地道に積み重ねていけば、必ず合格への道は開けるはずである。

世界史

（分析は本誌掲載問題のみです）

出題傾向

日程	問題	出題分野・テーマ	難易度
一般入試 1月31日	第1問	東南アジアと南インドの歴史 A：東南アジアの歴史 B：インド亜大陸の歴史	標準
	第2問	中国の明清時代 A：明の社会と経済 B：清の支配体制	標準
	第3問	両大戦間のヨーロッパ A：世界恐慌とファシズムの台頭 B：1930年代のヨーロッパ情勢	標準

大問3題・小問30問からなる構成である。上掲の日程の第1問から第3問までいずれもA・Bの2つのリード文からなっており、そのリード文に関連してそれぞれ小問が設定されている。2025年度入試まで小問数は40問であったが、2026年度は小問数30問と、10問減少している。解答方式は、全問マークシート方式である。

出題形式については、語句選択（語句組み合わせ問題も含む）や正誤文判定などを問う小問が出題されているが、例年、正誤文判定問題の比率が高い。2026年度の上掲の日程では、全小問30問のうち、正誤判定問題が21問と全体の70％を占め、ほかに資料文中の複数の空欄に入る語句の正しい組み合わせを選ぶ問題が4問、写真の遺跡を象徴する宗教とそれを建造した王朝の正しい組み合わせを選ぶ問題が1問、語句の空欄補充問題が3問、年代配列の問題が1問であった。出題範囲については、例年「中国とその周辺」および「ヨーロッパ」を二本柱として、それぞれ古代から現代までが出題されており、その傾向は2026年度のこの日程においても変化はない。一般入試前期日程の過去の出題範囲は以下のようになっている。

年度	第1問	第2問	第3問
2020年度	「オリエント史」	「古代中国史」	「19世紀から20世紀初頭のヨーロッパ史」
2021年度	「古代ローマ史」	「中国の唐から宋の時代」	「14世紀から17世紀のヨーロッパ」
2022年度	「隋・唐の中国史」	「フランス革命後の歴史」	「地中海世界の歴史」
2023年度	「中世の西ヨーロッパ」	「南アジアおよび東南アジアの歴史」	「戦間期のヨーロッパ諸国およびロシアの動向」
2024年度	「中国の秦・漢時代」	「近世ヨーロッパ」	「19世紀後半から現代までの東南アジア、南アジアの歴史」
2025年度	「地中海世界の歴史」	「産業革命とその影響」	「17世紀以降の中国の歴史」

出題範囲について補足すれば、大問数が3つという制約もあり、年度ごとに見ると、毎年の出題範囲は近接する内容のものもあり、ある程度限定されたものとなっている。もちろん、毎年特定の単元・テーマが出題されるというわけではないが、あくまで大問レベルで大まかに見て、「中国とその周辺」から1題、「ヨーロッパ史」から1題、「近現代史」から1題が出題される傾向にあったと言える。2026年度は第1問が東南アジアとインド、第2問が中国近世史、第3問がヨーロッパ近現代史というように出題内容が整理され、基本的には例年のパターンを踏襲している。一方、金城学院大学の出題傾向の特徴の変化として、文化史関連の問題が以前は多く出題されていたが、2025年度に続き2026年度も比較的少なかったという点が挙げられる。その代わり、2025年度、2026年度は資料や図を用いた問題が目立ち、これは大学入学共通テストの傾向に沿ったものとも考えられる。

以上のようにある程度の出題傾向は見られるが、金城学院大学を志す受験生には、特定の分野だけを集中的に学習するのではなく、世界史の全範囲を満遍なく学習してもらいたい。つまり、教科書のどの部分も疎かにできないということである。

難易度については、全体的に標準レベルからやや平易なレベルと言える出題が中心となっている。設問の多くは、教科書の内容をしっかりと習得できていれば、十分解答できるはずだ。しかし、正誤文判定問題の一部には、基本レベルより踏み込んだ内容も見られる。そうした問題に対処するためにも、金城学院大学の受験生には「教科書の精読」が必要であり、また、世界史用語集の活用も必要であると言えるだろう。

世界史

（分析は本誌掲載問題のみです）

学習対策

金城学院大学の世界史の入試問題は、〈出題傾向〉でも述べたように、正誤文判定問題が中心となっている。したがって、この正誤文判定問題の出来が合否を分けると言っても過言ではない。そのため、何をおいても教科書の基本事項や史実の流れを確実に頭に入れておくことが大切である。そうすれば、多くの設問は十分解答できるはずだ。まず教科書を一通り読み、基本事項や史実の流れをしっかりと確認しよう。ただし、一つひとつの史実を切り離して勉強するのではなく、それらの出来事の因果・相関関係、類似性や異なる点を正確に理解することが重要である。このようにして、基本的な知識を十分に身につけた上で、選択肢の短文を正確に読み、その正誤を判定する練習を積み重ねよう。

また、語句選択問題も一定数出題されているが、これについても、教科書の太字事項をしっかりと理解し、覚えておくことが学習の基本となる。その際、単に語句を暗記するだけにとどまらず、それらが史実の流れの中でどのような意味を持っているのかを十分に理解するようにしてもらいたい。また、語句選択問題に対しては、教科書の学習と並行して一問一答形式の問題集を使った学習・訓練を行うとさらに効果的である。そのような学習によって基本的な語句をしっかり把握できれば、正誤文判定問題に対しても役立つはずだ。

文化史に関連する出題は2024年度以降減少傾向にあるように見えるが、そうかといって全く出題されないわけではない。文化史についても、やはり教科書に太字で書かれるような重要語句は確実におさえておきたい。さらに、先述したように2025年度、2026年度は、図版や資料を用いた問題が比較的多く出題された。そのため、教科書を読む際は本文だけでなく、扱われている図版や資料をよく確認し、そこからどのようなことが読み取れるのかを意識して学習するようにしよう。

教科書を中心とした学習が一通り終わったら、市販の問題集などを用いた演習を行うことで、覚えたことがらのチェックをしていこう。大学入学共通テストの過去問などを用いて、正誤文判定問題や図版・資料の読み取り問題をできるだけ多く解いてみるとよいだろう。その場合、なるべく解説が充実している問題集を選ぶことを勧めたい。正解を得ることができなかった問題や選択肢文の正誤判断にあいまいさが残る設問などがあれば、その箇所の解説をよく読み、必ず教科書の該当箇所に戻って確認するようにしよう。このような練習を繰り返していけば、どれほど深く教科書を読み込まなければならないかがわかってくるはずである。また、模擬試験を受けることも有効な対策になるが、その結果だけを見て一喜一憂するのではなく、答えを間違えた設問については必ずどこが間違いだったのかを確認し、周辺事項も含めて知識を拡充しておこう。入試直前には、金城学院大学の過去問を、実際に時間を計りながら本番のつもりで解答してみるとよい。これは過去の出題傾向を知り、解答のペース配分などをつかむ上でも必要なことである。

以上のような地道な努力を日々積み重ねていけば、必ず合格への道が開けるはずである。

政治・経済

（分析は本誌掲載問題のみです）

出題傾向

日程	問題	出題分野・テーマ	難易度
一般入試 2月3日	第1問	第二次世界大戦後の国際経済体制 ブレトン・ウッズ体制、為替と通貨制度、国際収支、パリ協定、貧困問題と政府開発援助	標準
	第2問	A：第二次世界大戦後の人種・民族問題 アパルトヘイト、パレスチナ問題、ユーゴスラビア紛争、ルワンダ内戦 B：災害時における公助・自助・共助	やや易
	第3問	戦後日本経済の動向と政策 高度経済成長期の動向、戦後日本の産業構造の変化、直接金融と間接金融、非伝統的金融政策、公開市場操作	標準

2月3日の政治・経済の問題は、大問3題・小問31問から構成されている。第1問は短いリード文、第2問は2つの会話文によって設問のテーマが示された上で小問が設定されているが、第3問はリード文がなく11問の小問集合となっている。出題形式としては、全体として4択正誤問題が多いが、リード文の空所補充問題も見られた。なお、数値の計算を要求する問題や、図表や地図の読み取りなどを含む問題は出題されなかった。

出題分野については、経済分野からの出題が多く、国内政治分野からの出題は見られなかった。各問題は教科書に掲載された内容を問う標準的な難易度であり、難解な語句や細かな事項を問う問題はなかった。ただ、4択正誤問題では、政治や経済のしくみ、構造の変化、政策のポイントなどを十分理解し、整理できていないと正誤判断ができないものも出題されている。特に経済分野に関しては深い理解が必要とされており、単なる暗記だけで対応できるものではない。ただし、教科書を用いた学習を丁寧に行っていれば、正解を導くことは十分可能である。

2026年度　金城学院大学　政治・経済　傾向と対策

政治・経済

（分析は本誌掲載問題のみです）

学習対策

学習の基本は教科書の精読

もっとも重要なのは、教科書を精読し、基本的事項を整理しながら理解することである。金城学院大学の政治・経済の入試問題は、基本的に教科書に掲載のある内容から出題されるため、教科書に示された重要語句やその定義、政治や経済の基本的なしくみを、満遍なく全範囲にわたって学習しておくことがポイントである。できるだけ、苦手な分野は作らないようにしたい。

教科書の「目次」を活用した学習計画づくり

政治・経済は、国内政治・経済、国際政治・経済と、時事要素を含む現代社会の諸問題（地球環境問題、格差や貧困、紛争などの問題）を扱う単元で構成されており、各分野は関連しているため、網羅的な学習が不可欠である。そのような学習に有効なのが、教科書の「目次」を活用した学習計画の作成である。目次は、学習すべき内容の全体を把握し、入試に向けた学習計画を立てることに役立つ。また、学習の進度を目次でチェックすることもできるため、漏れのない学習ができているか、学習に遅れがないかなど、常に自分の学習状況を確認できる。

脚注・コラム・グラフ・表を活用しよう

教科書を読む際、本文はもちろんのことであるが、脚注・コラム・グラフ・表に至るまで目を配ることが必要である。これは、本文を読んだだけでは、政治や経済のしくみ、因果関係などを深く理解することが難しいということに加え、入試でよく問われる内容は、脚注やコラムに掲載されていることが多いからである。上掲の日程の入試問題を例にとって言えば、第1問で問われた国際収支のしくみやSDR（特別引出権）、第3問で問われた公開市場操作のしくみなどは、教科書の本文とは別に、脚注で詳しく解説されていることが多い。脚注やコラムだからといって、「どうせ補足的な内容だろう」などと疎かにせず、教科書の内容を深く理解するために積極的に活用しよう。また、グラフや表は、上掲の日程の問題では出題されていないものの、本文で記述されている内容を深く理解し、記憶に定着させることを助けるために掲載されている。細かな数値を一つひとつ覚える必要はないが、学習した内容がグラフや表でどのように示されているのか、その点を意識して確認するようにしてほしい。

法律・政策は「社会の諸課題を解決するために存在する」という視点を持つ

政治・経済では、多くの法律や政策について、その名称だけでなく内容に関する深い理解が必要とされる。法律や政策が整備される理由は、解決すべき課題が社会に存在しているからであり、学習の際には、法律や政策の存在意義、つまり「なぜこのような法律や政策が必要なのか」という視点をもつと、理解が深まりやすい。新しい法律が制定されるのは社会に変化が起きているからであり、経済政策は景気動向が変化しているからこそ更新される。法律・政策の「目的」も意識しよう。

ニュースや新聞をチェック

上掲の日程の入試問題では時事問題が直接問われることはなかったが、政治・経済の学習において国内・国外ともに最新の動向を把握することは重要である。これは時事問題対策のためだけでなく、学習した内容をきちんと理解できているかどうかのチェックに役立つからである。例えば、国会のしくみについて学習したとしたら、そのあとで国会に関するニュースを見ることで学習の理解度を確かめることができるだろう。ニュースなどで現在の出来事にアンテナを張り、政治・経済の学習をより一層深めていこう。

現代社会の課題を特徴づける最新の統計を把握

例えば、少子高齢化が問題となっていることは知っていても、老年人口割合や、合計特殊出生率などの具体的な数値を知っている受験生は多くないだろう。上掲の日程では、統計などを用いた問題は出題されていないが、現在の国内・国際社会がもつ課題を表すような統計は、大まかな数値や傾向とともに確認しておきたい。また、教科書や資料集などに示されたものだけでなく、最新のニュースなどで得られる情報も含めて把握しておくように心がけよう。

'26傾向と対策
'26総合型選抜入試
'26推薦入試
'26一般入試（前期）

生　物

（分析は本誌掲載問題のみです）

出題傾向

日程	問題	出題分野・テーマ	難易度
一般入試 薬学部 2月3日	第1問	生物の特徴	標準
	第2問	生物の特徴	標準
	第3問	生物の進化	標準
	第4問	遺伝情報の発現と発生	標準
	第5問	生命現象と物質	標準
	第6問	生物の環境応答	標準
一般入試 薬学部以外 2月3日	第1問	生物の特徴・予備学習（顕微鏡の使い方）	標準
	第2問	生物の特徴	標準
	第3問	ヒトの体内環境の維持	標準
	第4問	生物の多様性と生態系	標準
	第5問	ヒトの体内環境の維持・生物の多様性と生態系	標準

［薬学部（2月3日）］

解答方式は全問マークシート方式である。大問は6題で、マーク数は64であった。問題数は試験時間に対してやや多く感じられ、短時間で手早く問題を解いていく必要がある。

出題分野については、第1問と第2問が『生物基礎』の分野、第3問～第6問が『生物』の分野であり、生物基礎は「生物の特徴」からの出題、生物は「生物の進化」「遺伝情報の発現と発生」「生命現象と物質」「生物の環境応答」からの出題であった。教科書で「発展」とされている内容や、教科書の範囲外の内容は出題されていない。

難易度については、基礎から標準レベルの問題がほとんどとなっている。特に、重要な用語を問う問題が多く出題されており、基本的な事柄の定着の度合いによって、得点率は大きく変わるであろうと考えられる。計算問題の出題は第1問～第3問で見られ、難易度はいずれも標準的なものであった。ただし、第2問の問4～6、および第3問の問6では、正解の値について、各位の数字を答える必要のある問題（例えば、計算結果が「28」の場合、それぞれの解答番号に「2」「8」を順に選び、どちらも正解と一致した場合にのみ得点が与えられるタイプの問題）が出題されている。それだけ正確な計算の能力が試されているということだ。計算問題のテーマとしては、DNA分子中の塩基の割合を問うものや、減数分裂時の染色体の分配パターンについて問うものなど、大学入試として頻出のテーマが見られたが、その中には、やや難易度が高くなるように工夫されているものもあった。例えば、第3問では、減数分裂時の染色体の分配パターンについて、乗換えが起こった場合を考えさせる問題（通常のパターンでは「乗換えは起こらない」とされていることが多い）が出題されたりしていた。高得点を狙うためには、このように少しひねった問題もスムーズに解くことができるように、準備をしておくことが必要だろう。

［薬学部以外（2月3日）］

解答方式は全問マークシート方式である。大問は5題で、マーク数は64であった。問題数は試験時間に対してやや多めであると言える。

出題分野については『生物基礎』の範囲となっており、冒頭の「予備学習」も含め、「生物の特徴」「ヒトの体内環境の維持」「生物の多様性と生態系」から出題されている。出題される分野に偏りはなく、『生物基礎』の全範囲が問題となっている。教科書で「発展」とされている内容や、教科書の範囲外の内容は出題されていない。

難易度については、教科書に記載のある重要な用語について問う問題が大部分を占めており、基礎から標準レベルのものがほとんどである。そのような中においても、細胞の構造を問う問題では、「ネンジュモ（シアノバクテリア）」、「オオカナダモ（被子植物）」などの具体的な生物名とその分類を理解している必要があったり、細胞の大きさを問う問題では、対数目盛を用いて読み取る必要があったりして、単純な問題ばかりではないことには注意を払う必要がある。また、実験考察問題などの、複雑な問題の出題は見られなかったが、いくつかの計算問題が出題されていた。具体的には、第1問の問5はミクロメーターについて、第2問の問4・問5はDNAの塩基の比率について、第2問の問6は細胞周期についての計算問題であった。これらの計算問題は、教科書の章末問題とほぼ同等レベルであり、難易度はそれほど高くはないものの、薬学部と同様に正

生　物

（分析は本誌掲載問題のみです）

確な計算の能力が試される問題や、少しひねったタイプの問題も含まれているため、十分な対策を行っておきたい。

学習対策

上記のような生物の出題の傾向を踏まえて、必要となる学習対策を考えていこう。まず、基本的な用語を確認する問題や、その用語の意味を問うような問題が多く出題されていることから、『生物基礎』や『生物』の教科書の内容をしっかりと理解することが、第一の目標となる。『生物基礎』のみが出題範囲となっている学部と、『生物基礎』と『生物』の両方が出題範囲となっている学部では、当然のことながら学習の負担は大きく異なってくるが、いずれにせよ、余裕をもって学習を終えられるように、早い段階で計画を立ててほしい。高等学校や塾・予備校のカリキュラムにしたがって学習しているのであれば、入試に間に合わないということはないだろうが、生物の履修をしておらず、自力で学習を進めている場合には、特に注意が必要である。具体的な学習の進め方としては、『生物基礎』のみであれば「生物の特徴」「ヒトの体内環境の維持」「生物の多様性と生態系」を順に学んでいこう。さらに『生物』まで必要な場合は、「生物の進化」「生命現象と物質」「遺伝情報の発現と発生」「生物の環境応答」についても学習していこう。『生物基礎』の「生物の特徴」は、『生物』の「生命現象と物質」や「遺伝情報の発現と発生」を学習する上で基盤となる内容を含むので、特に最優先で学習を終わらせるようにしよう。学習を進める際には、教科書の章末問題が簡単に解けるようになることを最初の目標としてほしい。市販の問題集は、それができるようになってから取り組むとよいだろう。問題集のレベルとしては、基礎から標準レベルの問題で構成されたものを使っていくとよい。発展的な問題まで記載されている問題集の場合は、基本問題までを用いていくとよい。論述問題は出題されないので、演習の際には後回しにしてもよいが、「光補償点とは何か述べよ」「原核細胞と真核細胞の違いを述べよ」などといった重要事項を説明する問題は、より深い理解につながるので、高得点を目指すのであれば、論述にも取り組んでみてほしい。計算問題については複数の出題が見られることもあり、繰り返し演習して解法を身につけておく必要がある。「ミクロメーターに関する計算」「シャルガフの規則を用いたDNAの塩基の比率に関する計算」「ヒトゲノムの塩基対数や、そこに含まれる遺伝子の個数などに関する計算」「細胞周期の各期の長さに関する計算」「暖かさの指数に関する計算」などは頻出のテーマであり、今回もいくつかの出題があった。これらの計算問題については、それぞれ複数のパターンの問題で練習を積み重ねておこう。

入試の直前には、過去の入試問題を用いた演習を行うとよいだろう。実際の試験時間と同じ時間をタイマーなどで計り、時間配分を考えながら解いてみよう。出題傾向の項で述べた通り、試験時間に対して問題数が多くなっているため、時間配分を考えながら解くことは非常に重要となる。途中でよくわからない問題にぶつかったときはいったん後回しにし、5～10分程度の余裕をもって終わらせることができるようにしてほしい。このように見直しの時間を確保し、それを有効に使うことで、高得点を目指せるようになるだろう。目標は他教科の得点にもよるが、できれば9割以上を目指していこう。目標に届かなかった場合は、間違えた問題をピックアップし、問題集で類題を解き直すことを繰り返すことが大切である。

化　学

（分析は本誌掲載問題のみです）

出題傾向

日程	問題	出題分野・テーマ	難易度
総合型選抜入試（薬学科）9月20日	第１問	**化学基礎**：物質の構成（元素の周期表、分子の極性、気体密度、イオン結合、分子結晶の特徴）	やや易
	第２問	**化学基礎**：物質の構成（イオンからなる身のまわりの物質、不動態になる金属） **化学**：無機物質（アンモニアとアンモニウム塩の性質と反応、気体の性質と反応）	標準
	第３問	**化学**：有機化合物（エステル結合を含まない物質、炭化水素の性質と反応、異性体、アルコールの性質と反応）	標準
	第４問	**化学基礎**：物質の変化（酸と塩基の定義・分類、酸化還元反応） **化学**：物質の変化と平衡（反応速度、理想気体の法則、コロイドの性質）	標準
一般公募制推薦入試（食環境栄養学科）11月22日	第１問	**化学基礎**：物質の構成（物質の分類、混合物の分離・精製操作、同素体、物質を構成する元素の検出反応、粒子の熱運動、物質の三態間の変化、原子の構造、化学結合）	やや易
	第２問	**化学基礎**：物質の変化（物質量を用いる基本計算、溶液濃度の計算、化学変化と量的関係、溶液pH、酸と塩基の定義、塩の加水分解反応、酸化剤と還元剤、イオン化傾向）	やや易
一般公募制推薦入試（薬学科）11月22日	第１問	**化学基礎**：物質の構成（原子の構造、同素体、分子の形、結晶の種類）、物質の変化（物質量の基本計算）	やや易
	第２問	**化学**：無機物質（アンモニアの性質、鉄（Ⅲ）イオンの反応、アルカリ金属元素・アルカリ土類金属元素の単体と化合物の性質、貴ガスの性質、酸化鉄（Ⅲ）の還元反応に関する計算）	標準
	第３問	**化学**：有機化合物（フェノール類、異性体、ベンゼンの性質と反応、芳香族化合物の反応）	標準
	第４問	**化学基礎**：物質の変化（溶液pH） **化学**：物質の状態と平衡（理想気体の性質、浸透と浸透圧）、物質の変化と平衡（反応速度式の決定、化学平衡）	標準
一般入試（薬学科以外）１月31日	第１問	**化学基礎**：物質の構成（物質の分類、炎色反応、同位体、電子配置、放射性同位体の半減期、化学史、イオン結晶の性質、共有結合、水分子の性質、金属・合金の性質）	やや易
	第２問	**化学基礎**：物質の変化（物質量を用いる基本計算、溶液濃度計算、化学変化と量的関係、弱酸の電離度、中和滴定、酸化数、酸化還元反応、イオン化傾向）	標準
一般入試（薬学科）１月31日	第１問	**化学基礎**：物質の構成（電子配置、化学結合、原子の構造、物質の分類、物質の三態間の変化、電子式）	標準
	第２問	**化学**：無機物質（銅（Ⅱ）イオン・鉛（Ⅱ）イオンの反応、二酸化硫黄の実験室的製法、酸化物の性質、ハロゲン元素の単体・化合物の性質と反応、マグネシウムとカルシウムの単体・化合物の性質と反応）	標準
	第３問	**化学**：有機化合物（水と任意の割合で混ざる有機化合物、官能基の種類、ヨウ素デンプン反応、アルコールの構造決定、芳香族化合物の分離操作、アルケンの付加反応）	標準
	第４問	**化学基礎**：物質の変化（塩の加水分解反応、酸化還元反応） **化学**：物質の状態と平衡（コロイドの性質、状態図）、物質の変化と平衡（硫化水素の電離定数、活性化エネルギー）	標準

［薬学科］

総合型選抜入試（基礎Ⅰ型）、一般公募制推薦入試、一般入試ともに「化学基礎」と「化学」から大問が４題出題されている。

設問数は大問ごとに小問２問～５問が出題され、全体の解答数は、総合型選抜入試では、50分間で20、一般公募制推薦入試では45分間（２科目で90分間）で20、一般入試では60分間で24となっている。

解答方式は、４個～６個の選択肢の中から１個の正解を選択して、その番号をマークシートに解答する方式であり、いずれの入試種別でも記述方式は１問も出題されていない。

化　学

（分析は本誌掲載問題のみです）

各設問の難易度は、大部分が標準レベルとなっている。ただし、総合型選抜入試と一般公募制推薦入試の難易度レベルはほぼ同じであるが、一般入試ではやや難易度が高くなっていると言える。

出題内容は、総合型選抜入試、一般公募制推薦入試、一般入試ともに、物質の分類、原子の構造、化学結合、酸と塩基、酸化と還元、無機物質の性質、有機化合物の性質と反応などに関する問題が出題され、それらの全てが基本理論・基本知識が身についているかどうかを確認するような問題であった。難解な応用問題は１問も出題されていない。また、筆算を必要とする計算問題については、総合型選抜入試では１問も出題されず、一般公募制推薦入試では物質量の計算問題１問のみ、一般入試でも化学変化と量的関係に関する計算問題１問のみが出題されていた。他大学の薬学部の入試問題と比較して、計算問題の出題数が少ないことが金城学院大学薬学部薬学科入試の大きな特徴とも言える。

［薬学科以外］

一般公募制推薦入試、一般入試ともに「化学基礎」から大問が２題出題されている。

設問数は大問ごとに小問９問または10問が出題され、全体の解答数を見ると、一般公募制推薦入試では45分間（２科目で90分間）で18、一般入試では60分で19となっていて、試験時間に違いはあるものの、入試種別による解答数の違いはほとんどない。

解答方式は、全ての問題が４～７個の選択肢の中から１個の正解を選択して、その番号をマークシートに解答する方式であり、いずれの入試種別でも記述方式は１問も出題されていない。

出題された問題自体の難易度は、薬学科で出題された「化学基礎」とほぼ同じ標準レベルであるが、出題範囲に「化学」が含まれていない分、薬学科の「化学基礎」・「化学」の問題よりは解答しやすいと言える。

出題内容については、薬学科で出題されている「化学基礎」領域の問題には出題されていない化学史（人物名の選択）に関する問題が一般入試の第１問で出題された。この問題以外は、正誤判定問題、物質量計算、溶液濃度計算、化学変化と量的関係に関する計算、中和滴定に関する計算問題などを中心としたもので、薬学科とほぼ同じであるが、筆算を必要とする計算問題の割合が、薬学科で出題される計算問題の割合より高い傾向が見られる。

学習対策

金城学院大学の化学の入試問題は、教科書の範囲内の内容をしっかり理解し、高等学校課程で履修すべき基本事項が定着している受験生を合格者として選抜する問題である。出題された全ての問題は、高等学校の教科書に記載された内容を前提としていて、問題のテーマとなる図やグラフ、正誤判定問題の記述なども教科書に記載されたものとほぼ同じか、それを参考にしたものが多い。教科書の例題・章末問題などを参照したと思われる類似問題も多数出題されている。したがって、金城学院大学の化学の入試対策用の教材としては、高等学校で使用している『化学基礎』および『化学』（薬学科受験生）の教科書を中心とするのが最適である。

具体的な受験準備として、高等学校で使用していた『化学基礎』および『化学』（薬学科受験生）の教科書をはじめからおわりまで、まずはよく読むことが大切である。金城学院大学の入試では教科書の「発展事項」からの出題がないので、この部分は要点を押さえて読みたい。また、教科書の本文だけではなく、図表の説明文、欄外の補足事項、まえがき、付録も含めて熟読し、知っている、または理解している事項を確認するとともに、知らなかった、または忘れてしまっていた事項をリストアップするとよいだろう。特に、高等学校の化学の授業をプリント中心で進めて、教科書を使用していなかった受験生は、この作業を必ず行ってもらいたい。教科書の巻末に付いている五十音順の索引を利用して用語や物質名をチェックすることも可能である。理解できていない基本理論や計算方法があれば、もう一度教科書を読んで学習し、必要であれば高等学校・塾・予備校の先生に確認するようにしよう。

このようにして高等学校の教科書をしっかりと勉強すれば、あえて難しい参考書にまで手を出す必要はない。また、もし可能であれば自分の使用している教科書とは異なる出版社の教科書を入手して、同じようにそれらの教科書を学習してみることも効果的である。

入試の直前には、過去問を使った演習を行おう。金城学院大学の出題内容と様式は毎年ほとんど決まっていることから、その内容と様式に慣れるためにも、過去問演習は不可欠である。入試種別によって試験時間が異なるので、自分が受験する入試の試験時間を確認して、その時間内で解いてみよう。不正解となった設問については、必ず教科書の該当ページを開いて、正解を得るために必要な理論・知識を再確認しておくこと。過去問を使って十分に演習を積み重ね、さらに余裕がある場合には、市販の問題集や他大学の過去問で類似問題を解いてみるのもよいだろう。

以上のような学習を地道に積み重ねていけば、必ず合格への道は開けるはずである。

数　学

（分析は本誌掲載問題のみです）

出題傾向

日程	問題	出題分野・テーマ	難易度
総合型選抜入試 9月20日	第1問	小問集合 問1　数学Ⅰ　数と式（式の値の計算） 問2　数学Ⅰ　2次関数（2次関数のグラフ） 問3　数学Ⅰ　2次関数（2次関数のグラフ）	 やや易 やや易 やや易
	第2問	小問集合 問1　数学A　場合の数（組分け） 問2　数学A　確率（確率の基本性質）	 やや易 標準
	第3問	数学Ⅰ　図形と計量（三角比の基本性質）	やや易
一般公募制推薦入試 11月22日	第1問	小問集合 問1　数学Ⅱ　いろいろな式（高次方程式） 問2　数学Ⅰ　2次関数（グラフと軸の共有点）	 標準 やや易
	第2問	数学A　確率（確率の基本性質）	やや易
	第3問	数学Ⅰ　図形と計量（三角比の基本性質） 数学A　図形の性質（線分比、面積比）	標準
一般入試 （工・薬学部） 1月31日	第1問	小問集合 問1　数学Ⅰ　数と式（式の値の計算） 問2　数学Ⅱ　指数・対数（指数関数と最大・最小） 問3　数学Ⅱ　三角関数（三角関数と方程式）	 やや易 やや易 標準
	第2問	数学B　数列（漸化式）	標準
	第3問	数学Ⅱ　微分・積分（接線と面積）	標準
一般入試 （工・薬学部以外） 2月2日	第1問	小問集合 問1　数学Ⅰ　数と式（因数分解） 問2　数学Ⅰ　数と式、2次関数（不等式）	 やや難 標準
	第2問	小問集合 問1　数学A　場合の数（約数の和） 問2　数学A　場合の数（組分け）	 やや易 やや易
	第3問	数学A　図形の性質（線分比、面積比）	標準

解答方式は、いずれの日程も全問マークシート方式である。試験時間については、総合型選抜入試は50分、一般公募制推薦入試は2科目選択で合計90分（実質的には数学だけで45分）、一般入試は工・薬学部、その他学部のいずれも60分である。

出題範囲については、一般入試（工・薬学部）は数学Ⅰ・Ⅱ・A・B（数列）・C（ベクトル）である。これ以外の試験種はいずれも数学Ⅰ・A（図形の性質、場合の数と確率）である。

いずれの日程も大問3題からなる構成である。また、多くの大問が、独立したテーマの設問2～3題を並べた小問集合となっている。一部の大問は、全体において一つのテーマから出題した上で、小問に分割して内容を問う形式となっている。問題の難易度は、概ね教科書の章末問題のレベルをやや超える程度で、入試基本レベルのものが中心と考えてよい。高度な発想や特殊な技法が求められたり、膨大な量の計算が必要となったりするようなことはない。ただし、公式を暗記して数値を当てはめるだけで解けるような単純な問題もほとんどない。各分野における基本的な概念・公式の意味・使い方を理解した上で、問題の意図と状況設定を的確に読み取りながら解き進めることが求められる問題である。

以下に、2026年度の日程ごとの具体的な出題内容を概観する。

［総合型選抜入試］

大問1、2が小問集合で、数学Ⅰ・Aの各分野から大きな偏りなく出題されている。出題傾向、難易度、問題量のいずれについても2025年度の各試験種と比較して大きな違いはない。分量に対し適切な試験時間であり、各設問ともに検算を含め慎重に取り組みたい。

第1問：やや易～標準的な難易度の小問集合である。問1は無理数の計算であり、直接代入計算しても答えは得られるが、やや面倒であり、式の対称性を利用するとよいだろう。問2は2次関数の式を決定する問題で、教科書で扱われる基本的な内容である。また、問3は2次関数のグラフが軸と接する条件を考える問題である。これも基本的な内容であり、確実に正解を得たい。頂点の座標から考えても、判別式から考えてもよい。

第2問：問1は複数人をいくつかの組に分ける問題である。教科書の基本的な例で問われる内容であり、分けた組に区別があるのか、ないのかに注意して計算したい。問2は6人が輪になったときに条件を満たす

数　学

（分析は本誌掲載問題のみです）

並びになる確率を考える問題である。いわゆる「円順列」を数える問題と混同しがちである。場所を区別するなどして考えたい。

第3問：図形と計量、三角比の諸定理の使い方を確認する基本的な問題である。余弦定理により辺の長さを求めたり、正弦定理により角の大きさや外接円の半径を求めたりする基本的な練習を積んでおけば対応できる。

［一般公募制推薦入試］

大問1は、やや計算量のある小問集合である。大問2、3はそれぞれ一つのテーマから構成される問題である。全体として、難易度、問題量とも2025年度の試験から大きな変化はない。

第1問：問1は高次式の計算問題である。3文字の対称式となっていることから、むやみに文字を消そうとせずに、対称性を利用して計算を進めたい。問2は放物線が座標軸と2点で交わるときに、2点を結ぶ線分の長さに関する問題である。素直に、軸との共有点のx座標を求めてしまっても問題はないが、解と係数の関係を利用して計算することもできる。

第2問：球を取り出すときの確率をテーマとした問題である。袋から球を2個取り出し、同色の球である確率や色が異なる確率を問う定番の問題が前半に配置される。後半は条件付き確率の設問である。いずれも、教科書の基本的、標準的な問題に習熟していれば解答可能である。

第3問：平面図形に関する問題である。三角比の基本的な性質、内接円の半径と面積の関係、平面幾何の諸定理の使い方を十分に練習しておきたい。

［一般入試（工・薬学部）］

大問1は、やや手数の多い小問集合である。大問2、3はそれぞれ一つのテーマからの出題である。難易度、問題構成とも2025年度の試験から大きな変化は見られない。各大問で取り扱われるテーマについても、多少の変動はあるものの概ね2025年度と同傾向と見てよい。

第1問：問1は値の計算である。2文字の対称式であるため、むやみに代入せず和と積に整理しながら計算するとよい。問2は基本的な指数関数の計算問題である。置き換えた文字の変域に注意して計算する必要がある。問3は三角比で表された等式を満たす値を求める問題である。2倍角の公式を用いた上で、等式を適切に書きかえる必要があり、問1、2と比べるとやや難易度が高い。

第2問：主に数列に関する問題である。三角形の辺の上に、規則にしたがってとる点を結んでできる図形の面積に関して考察することになる。図形の相似比に着目して漸化式を立て、これを解いていく。誘導は丁寧ではあるものの、漸化式の処理に習熟している必要がある。なお、最後の設問のみベクトルの内積に関する問題となっている。

第3問：数学Ⅱの微分・積分に関する問題である。3次関数のグラフと直線の位置関係を調べ、それらの囲む部分の面積を考える。連立方程式の解を、グラフ同士の位置関係と解と係数の関係などから読み取ること、定積分の計算の工夫など、総合的な力が試される。

［一般入試（工・薬学部以外）］

大問1、2、3それぞれ、小問から中問程度のボリュームを持つ問題の集合である。他の試験種のように、大問全体で一つの大きなテーマを扱っている大問は存在しない。難易度は2025年度の試験から大きな変化は見られない。

第1問：問1は高次式の因数分解に関する問題である。（1）は与えられた式の形をよく見た上で、置きかえなどを通じて2次式のように捉えるとよい。展開してしまうとかえって難しい問題になりかねない。（2）は様々な考え方があるが、xかyの一方の文字に着目して整理する考え方が王道だろう。（3）は経験がないとやや難しいが、答えの形は見えているのでここから逆算するとよいだろう。問2は絶対値記号つきの不等式の処理である。絶対値記号は記号の中身の正負で場合分けをせずに、絶対値が数直線上の距離を表すという定義から処理をする。さらに2次不等式の処理が続くので、計算力が必要な問題である。

第2問：問1は場合の数の問題で、1200の正の約数の個数と総和を求める、基本的な整数の問題である。素因数分解を通じた考え方を理解しておきたい。問2も場合の数の問題で、9冊の異なる本をいくつかの組に分ける方法を考える。典型的な内容であり、十分に準備しておきたい。

第3問：問1は図形の性質からの出題で、三角形と円の関係、方べきの定理などを正しく運用できるかを試す問題である。基本的な定理の使用例を練習しておけば対応できる内容である。問2も図形の性質からの出題であり、三角形の各辺の内分点を与え、頂点とそれらを結ぶ線分を調べる問題である。メネラウスの定理を利用する定番の形であり、様々な問題にあたってきた人であれば経験のある構図だろう。

学習対策

入試問題としては基本的～標準的な難易度の問題が中心である。出題範囲全般について漏れなく、抜けのない基礎的な学力をつけていけば、それ自体が最大の入試対策となるはずである。

まずは出題傾向を必要以上に気にすることなく、一つひとつの項目について、教科書の内容を正しく理解できているか、またそれを実際の問題に応じて運用できるかを丁寧に確認するところから始めよう。実際に手を動かして教科書の例題・章末問題等を解きながら、基本的な公式・概念と、その典型的な利用法を確認し、定着させていきたい。問題演習の際には、公式を暗記して機械的に当てはめたり、類題の解答をなぞったり

数　学

（分析は本誌掲載問題のみです）

するだけにとどめず、常に理解を伴うように心がけてほしい。なぜその定理を用いるのか、なぜその方針が有効なのか、自分なりに考えながら解いていくことが、内容の深い理解へとつながる道筋となるはずである。各分野について基礎事項の理解・定着を確実なものにした上で、過去問や、入試問題集等を題材に、頻出事項や自分の苦手分野について問題演習を重ねていこう。

以下で、頻出項目ごとの学習のポイントを見ていきたい。

数と式（数学Ⅰ）

特に小問集合において、無理数の計算は頻出である。式の対称性に着目して、極力計算量を減らせるように工夫したい。また、整数部分と小数部分に関する考え方などを整理しておこう。練習の際には、自分の行いがちな計算ミスのパターンを確認し、注意するようにすれば少しずつ正確性が増していくだろう。また、方程式や不等式に関して、絶対値記号を含む問題を苦手とする受験生は多い。同値な変形と、場合分けによる絶対値の処理を練習しておいてほしい。

２次関数（数学Ⅰ）

放物線の式を決定する問題では、条件に応じた式の置き方などを考えて、計算が複雑にならないよう方針を工夫しよう。２次関数の区間内での最大値、最小値に関する問題も頻出である。定義域や頂点の位置を意識して、グラフを活用する練習を重ねておきたい。また、方程式や不等式の問題においても、２次関数のグラフをイメージしながら考える練習を行っておこう。

データの分析（数学Ⅰ）

2025年度、2026年度と出題がなかったものの、度数分布やヒストグラム、箱ひげ図の読み取り、平均値、分散、標準偏差の計算などは出題されやすい。必要最低限の用語・計算方法の確認はしておこう。大学入学共通テストを受験する場合は、そちらの対策と兼ねれば十分だろう。

場合の数と確率（数学A）

重要分野、頻出分野である。もとより、得意・不得意な受験生の差が大きく出やすい分野でもある。問題を解く際には、慌てて公式や解法を当てはめようとするのではなく、設問で与えられた状況を自分が処理しやすい形に読み砕いていく姿勢が重要であろう。必要があれば樹形図などを利用しながら、具体的なパターン例を書き出すことを心がけよう。設問の意図する状況を咀嚼した上で、それに基づいて計算式を立式するようにしたい。

図形の性質（数学A）

図形問題においては、どのような問題においても、まず自分で、道具に頼らずに図を描きながら考える癖をつけよう。問題を正確に読み取る訓練になると同時に、どの情報が何を求めることにつながるかを見抜く手がかりともなる。また、メネラウスの定理や、方べきの定理などの重要な定理は、計算方法を覚えるだけでなく、どのような状況で使えるものなのかを理解しておくことが決定的に重要である。

式と証明・高次方程式（数学Ⅱ）

複素数の計算、高次方程式の解法、整式の除法などは小問集合において頻出である。テーマが多岐にわたる分野ではあるが、解と係数の関係、因数定理、二項定理などを中心に基本的な問題で練習を積んでおくとよい。

指数関数・対数関数（数学Ⅱ）

小問集合での出題が多い。指数関数と対数関数の相互関係を押さえた上で、公式を整理していくとよいだろう。置きかえを伴う計算が多く、元の文字との対応を確認し、新しく置いた文字の変域を常に調べる癖をつけたい。どの文字について解いているかを意識しておこう。基本的な指数法則・対数の性質、底の変換公式などについては正確に計算できるよう、基本レベルの問題を繰り返し演習しておこう。

三角関数（数学Ⅱ）

方程式・不等式、最大・最小問題が出題の中心となる。また、倍角の公式や半角の公式などは、加法定理から自力で導き出せるようにしておきたい。三角関数の合成も加法定理と関連させながら式変形の意味・手順を理解しておこう。

微分・積分（数学Ⅱ）

大問で出題されることの多いテーマである。過去にはかなり複雑な面積の計算問題なども見られた。標準レベルの受験問題集を用いた演習を重ねながら、接線の方程式や関数の増減、グラフの囲む面積など頻出事項について考え方の流れを定着させていこう。３次関数のグラフの概形は速やかにイメージできるようにしておきたい。また、面積の計算公式を利用した問題もテーマとなりやすいので、どのような状況でどのような計算の工夫が使えるのか、正確に整理しておくとよいだろう。

数列（数学B）

等差数列、等比数列についての出題は頻出である。一般項、和の公式は、一度は自力で導出しておいてほしい。また、得られた答えについて、具体的な数値を代入して妥当性をチェックするという視点も忘れないようにしたい。和の計算、漸化式についてはやや高度な出題がなされることもあり、苦戦する受験生もいるかもしれない。あらゆる漸化式に対応するのは難しいものの、少なくとも基本的、典型的なパターンについては対応できるよう準備しておきたい。置きかえを伴う問題も多く、これらも練習しておきたい。

ベクトル（数学C）

内積を利用した、長さや面積の計量はしばしば出題される。計算方法を確認しておこう。内分点・外分点などを利用して位置ベクトルを決定する問題も多い。必要な情報を絞り込んで図形的状況を図示しながら考えていこう。